

< 2018 年 2 月 >

古賀 順子

「ル・コルビュジエ船
『ルイーズ・カトリヌ号』が沈没」

年明けから続いていた長雨の影響が、思いも寄らぬ事態を引き起こしました。

2月10日(土) 正午、パリ・オーステルリツ橋のもとに繋留されている「ルイーズ・カトリヌ号」がセヌ川に呑み込まれました。ル・コルビュジエが救世軍の依頼を受けてリノベーションした運搬船で、時代を象徴する特異な歴史を歩んできました。

4日からの突然の寒波で、パリにも積もった雪が残る土曜日でした。セヌ川増水が引き始め、船が岸に乗り上げていることが分かり、セヌ川床に押し戻した直後の出来事です。20分もかからずに船はセヌ川に沈んでしまいました。

セヌ川が通常の水位に戻るにはまだ時間がかかり、観光船も1ヶ月以上営業停止を余儀なくされています。15日の時点でも、「ルイーズ・カトリヌ号」はマストの先だけを残したまま水に潜っています。重さ800トン、長さ70m、幅8mのコンクリート船ですから、クレーンで引き揚げるには膨大な費用がかかり、水が引くのを待つしかありません。一日も早くセヌの水が引き、再浮上に向けて介入できることを待つ日々が続いています。13日(火) ルイーズ・カトリヌ協会とル・コルビュジエ財団のコミュニケが財団のFaceBookにも発表されました。

再浮上し、修理が可能で、セヌ川に浮かび続けることを心から祈ります。

ルイーズ・カトリヌ協会

ル・コルビュジエ財団

共同声明

《連帯の証しとしての歴史》

1919年、長さ70m、幅8mの鉄筋セメント製の平底船が造られ、第一世界大戦で破壊された都市名に因む「リエージュ号」と名付けられた。パリに石炭を供給する目的である。1929年、マドレーヌ・ジルハルトの寄付のおかげで、救世軍がこの船を買取り、彼女の友人ルイーズ・カトリヌ＝ブレスローの名前になった。

シンガー・ポリニャック公爵夫人の援助を受けて、ル・コルビュジエがこの船の改造を行い、「ルイーズ・カトリヌ号」と命名された。

70年間、救世軍がこの船に「住所不定のホームレス」を収容してきた。

この「アジール・フロタン(浮かぶ避難所)」は、1995年その活動に終止符を打った。

2006年、5人の有志がこの船を購入し、文化の場になりたいと願った。

2008年、「ルイーズ・カトリヌ号」は、歴史的建造物に登録された。

この船の再生は、フランス文化省と日本の建築家たちの貢献によって進められている。

《2018年2月10日土曜日正午、何が起こったのか》

セヌ川増水は、2018年1月29日ピークを迎え、5,84mに達した。平底船「ルイーズ・カトリヌ号」が岸に流された。水が引き始め、2月7日、舳先が岸のヘリに掛かっている状態になった。

2月8日(水深4,60m)、河川警備隊と消防が船をセヌ川床に押し戻そうとしたが、失敗に終わった。

2月10日土曜日、「シャンティエ・デ・オ・ド・リュテース」社の引き船を動員し、「ルイーズ・カトリヌ号」を川に戻そうと試みた。船が岸に座礁しないよ

うに、船と岸の間の距離を保つための固定棒を取り付けようとした。思ってもいなかったことに、この固定作業が、船に衝撃を与え、浸水を招いた。

現在、「ルイーズ・カトリーヌ号」はセーヌ川の底に沈んでいる。

モーターのない建造物であるから、石油製品は一切なく、造船にアスベストも使用されておらず、セーヌ川の水を汚染することはない。

《今後どうするか》

セーヌ川が通常の水位に戻れば、船の姿が見えてくるだろう。

平らな甲板部分が水から上がってきたら、河川の専門家ジョルジュ・グラヴォー氏が監督する潜水隊に船内に潜ってもらい、どのような修理が必要か調査してもらう予定だ。

裂け目を塞ぎ、船体に溜まった水を外に汲み出し、「ルイーズ・カトリーヌ号」が再び浮上することを願っている。2019年、ル・コルビュジエ財団とそのパートナーの協賛で、この船の百周年を祝う予定である。日本企業「アロイ社」から2機の栈橋を寄贈していただくことになっている。日仏通商講和条約締結160周年を記念して、この船の歴史とル・コルビュジエの作品に情熱を傾けてくださる日本人建築家たちの作品展を、この秋、船内で開催することも決まっている。

ル・コルビュジエ財団、そしてルイーズ・カトリーヌ協会友の会は、この作品と歴史を今後も絶やさないことを支援する。

2018年2月13日、パリ

ルイーズ・カトリーヌ協会代表

ミシェル・カンタル＝デュパール

ル・コルビュジエ財団理事長

アントワーヌ・ピコン

